■追悼文

木代純逸君を悼む

山崎良成（日本原子力研究所）

去る5月11日朝，木代純逸さんが亡くなられました．ここに，友人として，同僚として，深く哀悼の意を表わすとともに，この一文を捧げます．

最初に木代さんと親しくお話したのは，二十年以上も前，DESYの宿舎ででした．当時は，木代さんも私も，ともに高エネルギー物理学研究所（現高エネルギー加速器研究機構，KEK）の助手で，本当に偶然に二人とも，DESYに研究活動の調査，議論に訪れていました．木代さんは新婚早々で奥様と御一緒でしたが，物理のこと，加速器のこと，KEKを，日本の加速器をどうすべきか，真剣に話し続けて，時のたつのを忘れたものでした．そのときに，木代さんの優れた見識，見通しに深く共感し，いつか一緒に仕事をしたいものだと，長く望んでいました．

やっと四年前，東海で大強度陽子加速器J-PARCを一緒に作ることになり，木代さんはシンクロトロンを，私はリニアックを担当することになりました．J-PARCは2001年度から7年計画で始まった，KEKと日本原子力研究所（原研）が共同して建設に取り組んでいる加速器計画です．400 MeV（当初は200 MeV）のリング入射器陽子リニアック，3 GeVの速い繰り返しの陽子シンクロトロン（RCS），50 GeVの陽子シンクロトロンの3つの加速器からなります．私は2002年2月から原研に移りましたが，木代さんにも名実ともにRCSのリーダーとして腕を振るって頂きたいと懇願し，2003年1月に同じく原研に移られました．

それからの木代さんは本当に凄まじいばかりの働き振りで，私の方が今一つ伸びないのに比べ，加速器でも，物理でも，そして人間的にも，目を見張るような進歩を見せました．まさに，世界一の性能を目指して，J-PARC加速器を作っている，そんなときでしたから，木代さんは，本当に無念だったと思います．病に倒れてからも，うわ言のなかでも，加速器のこと，物理のことを話していたと御家族からうかがっています．

ちょうど木代さんが亡くなられたころ，Particle Accelerator Conferenceの投稿論文の締め切りで，J-PARC加速器グループの人たちは毎晩夜遅くまで，それこそ夜中の3時，4時まで論文を仕上げていました．その時，木代さんのRCSの若い研究者たちから聞きましたが，こんな時には，木代さんがずっとそばにいて，逐一論文を直してくれたそうです．RCSグループは，数人のKEKの方を除くと，原研はほとんど30代の，血気盛んで優秀ではあるものの，どうしても経験がまだ不足している人たちが大半です．その彼等に，身を持って範を示し，引っ張って行っていました．ですから，木代さんの薫陶を受けた若い研究者が，必ず木代さんの遺志を受け継いで，計画を成功に導いてくれると信じています．

木代さんは非常に責任感の強い方でしたから，J-PARCのそれも最も難しいRCSの責任者になって頂きたいと頼んだ時，うまくいかなかったら，どうやって責任をとるのだと聞かれました．私は，死んでもやり遂げるのが責任の取り方だと，レトリックで言った積りでしたが，木代さんが育てた若い研究者が本当にやり遂げてくれると思います．

何でも根本から解きあかして行くと言う木代さんの学風は，まず御自身はBogoliubovの“Axiomatic Quantum Field Theory”を読破していたことから始まって，加速器の若い人たちにはBruckの教科書から勉強させていましたし，自らハミルトニアンから解き明かして加速器を教えていました．本当に，ビーム物理からハードの設計，企業との価格交渉まで，すべてにわたって文字どおりRCSの責任者として，道をつけていただきました．価格交渉でさえ，企業の営業担当者を，利ではなく，その人柄で説得していました．

二人で東海に単身赴任していましたので，仕事の相談はもちろんですが，よく食事をしながら家族の話もしました．お人柄で，照れて明からさまには言われませんでしたが，どんなにお嬢様を，奥様を愛していらっしゃるか，言葉の端々から察せられました．特に，私が父を亡くした時，食事に誘って下さって，博士号をとられた時や教授になられた時に，どんなにお母様が喜んで下さったかを語り，私を慰めてくれました．木代さんのこのようなお人柄を偲ぶ時，今でも涙を禁じ得ません．

木代さんには古武士の風格があると言った人がいます．本当に，知，情，意すべてを備えて，困難な計画に立ち向かって行き，そうして倒れられた木代さんは，ギリシャや北欧の英雄のように私には思えます．本当に理不尽な運命でしたが，それと戦い抜いて，立派な足跡を残されました．

心から御冥福をお祈りいたします．